

# 日本仏教教育学会第32回学術大会 プログラム

2023(令和5)年11月18日(土)13:00～

大正大学 巣鴨校舎3号館5階

\*公開講演会のみハイフレックス(対面+オンライン〈ZOOMによる〉)

13:00 開会式

13:10 研究発表

13:10-13:35 仏教離れと仏教教育 熊本英人(駒澤大学)

13:35-14:00 瑩山紹瑾による僧侶教育について 菅原研洲(愛知学院大学)

14:00-14:25 「宗教で苦しんでいる」とはどういうことなのか?鈴木一男(元千葉県公立高等学校)

14:25-14:50 浄土教と真宗一初期真宗と聖徳太子信仰 平田天石(山形大学)

14:50-15:05 コメント・質疑 【司会・コメンテーター:小池孝範(駒澤大学)】

15:05-15:15 休憩

15:15-15:45 会員総会

15:45-16:00 休憩

16:00-17:30 特別講演(公開講演・ハイフレックス)

高橋秀裕先生(大正大学前学長)

「教育現場における数学史の意義とは?そして少し仏教について」

17:30-19:00 懇親会〈予定〉

以上

## 日本仏教教育学会第32回学術大会発表要旨

### 熊本英人（駒澤大学） 仏教離れと仏教教育

一般に、日本社会での「仏教離れ」ということが言われている。

そもそも「仏教離れ」とは何か？ 具体的には、葬式無用論、墓じまい、離壇などがあげられよう。しかし、そこで言う「仏教離れ」とは、何から離れているのか？ 何を以て「仏教」とするのか？ そしてこのような状況に対して、「仏教教育」には何ができるのか？

一言で「仏教」「仏教離れ」「仏教教育」と言っても、そこには様々な定義、ステージがある。「仏教離れ」と「仏教教育」を語る場合にも、必ずしもそれぞれのステージがかみ合っておらず、結果として「仏教」の問題となっているのかどうか明確でない場合が少なからずある。

ここでは、「仏教教育」からみて「仏教離れ」とはどのような問題なのか、あらためて考察してみたい。

### 菅原研州（愛知学院大学） 瑩山紹瑾による僧侶教育について

2024年度は、曹洞宗で太祖と仰ぐ瑩山紹瑾（1264～1325）の七百回大遠忌となる。瑩山の教育論の検討は、50年前の六百五十回大遠忌に因み、田中敬信氏「瑩山禅師と教育—現代教育に関連して—」（曹洞宗宗学研究所『宗学研究』第16号、昭和49年）が発表された。同論は、副題の通り、瑩山の教育観を、当時の社会情勢などから検討された内容であった。

よって、本発表では、改めて瑩山の会下における、教育上の問題点とその解決法を検討したい。

また、曹洞宗の歴代祖師の法嗣は、瑩山の前後で、その数に大きな違いを生じた。つまり、曹洞宗の僧侶教育という点で、瑩山は転換期に位置した祖師ともいえる。そこで、例えば、先行する永平道元（1200～53）や、後に続く峨山韶碩（1276～1366）などの教育法と比較しつつ、瑩山に転換の様子を見出すことが可能かどうかを検討したい。

### 鈴木一男（元千葉県公立高等学校教諭） 「宗教で苦しんでいる」とはどういうことなのか？

宗教二世の方々が「宗教で苦しんでいる」という。過去には地下鉄サリン事件などが起こり被害者の方々が「宗教で苦しんでいる」という。基本的な問題として、宗教とは人々を苦しめるものなのだろうか？きつと世の中の多くの人々はそのように（その通りに）思っているに違いない。

小論では、「宗教で苦しんでいる」という言葉から来るそのモヤモヤを、是非とも解放したい。そして本来の宗教、またその定義に近付ければよいと考えている。方法としては、まず「宗教で苦しんでいる」といった場合の「宗教」とは何なのか、それはどんな事態なのかを、筆者がこだわり続ける哲学者シュティルナーの宗教の定義を参考に検討してみる。その後、いくつもの宗教の定義を見て来たわけだが、つい最近覚えたそれをそこに入れてみる。それが妙に落ち着きそうなのである。

## 平田天石（山形大学名誉教授） 浄土教と真宗—初期真宗と聖徳太子信仰—

親鸞は『教行信証』の末尾の後序で、「浄土の真宗」は證道いま盛んであるのに、「主上臣下、法にそむき義に違い」て、「真宗興隆の太祖」である法然とその門徒を、死罪にしたり、僧籍を剥奪して遠流に処したと嘆いている。そこで今後、非僧非俗の愚禿積親鸞と名乗って、「真宗の簡要、念佛の奥義」を撰在する法然の『選擇本願念佛集』を受けて、この『教行信証』で「真宗の詮を鈔し、浄土の要を拾う」と述べる。

さて、山田文昭は『真宗史の研究』の中で、幾つかの光明本尊を紹介している。それらは何れも真中に「南無不可思議光如来」を置き、左側に弥陀如来を基底にして龍樹から法照に至る浄土教の祖師を、右側に釈迦如来を基底にして聖徳太子から法然、親鸞らに至る真宗の祖師を描いている。また五来重は『聖の系譜と庶民仏教』の中で、聖徳太子と阿弥陀如来を並列するのは善光寺信仰が根底にあるからで、中世初期の原始真宗教団の存在を示すと言う。